

## 『念仏者の生き方』

仏教は今から約2500年前、釈尊がさとりを開いて仏陀ぶつだとされたことに始まります。わが国では、仏教はもともと仏法ぶっぽうと呼ばれていました。ここでいう法とは、この世界と私たち人間のありのままの真実ということであり、これは時間と場所を超えた普遍的な真実です。そして、この真実を見抜き、目覚めた人を仏陀といい、私たちに苦悩を超えて生きていく道を教えてくれるのが仏教です。

仏教では、この世界と私たちのありのままの姿を「諸行無常しよぎょうむじょう」と「縁起えんぎ」という言葉で表します。「諸行無常」とは、この世界のすべての物事は一瞬もとどまることなく移り変わっているということであり、「縁起」とは、その一瞬ごとにすべての物事は、原因や条件が互いに関わりあって存在しているという真実です。したがって、そのような世界のあり方の中には、固定した変化しない私というものは存在しません。

しかし、私たちはこのありのままの真実に気づかず、自分というものを固定した実体と考え、欲望の赴くままに自分にとって損か得か、好きか嫌いかなど、常に自己中心の心で物事を捉えています。その結果、自分の思い通りにならないことで悩み苦しんだり、争いを起こしたりして、苦悩の人生から一歩たりとも自由になれないのです。このように真実に背いた自己中心性を仏教では無明煩惱むみょうぼんのうといい、この煩惱が私たちが迷いの世界に繋ぎ止める原因となるのです。なかでも代表的な煩惱は、むきぼり・いかり・おろかさの三つで、これを三毒さんどくの煩惱といっています。

親鸞聖人しんらんしょうにんも煩惱を克服し、さとりを得るために比叡山ひえいざんで20年にわたりご修行に励まれました。しかし、どれほど修行に励もうとも、自らの力では断ち切れない煩惱の深さを自覚され、ついに比叡山を下り、法然聖人ほうねんのお導きによって阿弥陀如来あみだにょらいの救いのはたらきに出遇あわれました。阿弥陀如来とは、悩み苦しむすべてのものをそのまま救い、さとりの世界へ導こうと願われ、その願い通りにはたらく続けてくださっている仏さまです。この願いを、本願ほんがんといっています。我執がしゅう、我欲がよくの世界に迷い込み、そこから抜け出せない私を、そのままの姿で救うとはたらく続けていくくださる阿弥陀如来のご本願ほど、有り難いお慈悲じひはありません。しかし、今ここでの救いの中にありながら

も、そのお慈悲ひとすじにお任せできない、よろこべない私の愚かき、煩惱の深さに悲嘆せざるを  
えません。

私たちは阿弥陀如来のご本願を聞かせていただくことで、自分本位にしか生きられない無明の  
存在であることに気づかされ、できる限り身を慎み、言葉を慎んで、少しずつでも煩惱を克服す  
る生き方へとつくり変えられていくのです。それは例えば、自分自身のあり方としては、欲を少な  
くして足ることを知る「少欲知足」であり、他者に対しては、穏やかな顔と優しい言葉で接する  
「和顔愛語」という生き方です。たとえ、それらが仏さまの真似事といわれようとも、ありのまま  
の真実に教え導かれて、そのように志して生きる人間に育てられるのです。このことを親鸞聖人は  
門弟に宛てたお手紙で、「（あなた方は）今、すべての人びとを救おうという阿弥陀如来のご本願  
のお心をお聞きし、愚かなる無明の酔いも次第にさめ、むさぼり・いかり・おろかさという三つの  
毒も少しずつ好まぬようになり、阿弥陀仏の華をつねに好む身となっておられるのです」とお示し  
になられています。たいへん重いご教示です。

今日、世界にはテロや武力紛争、経済格差、地球温暖化、核物質の拡散、差別を含む人権の抑圧  
など、世界規模での人類の生存に関わる困難な問題が山積していますが、これらの原因の根本は、  
ありのままの真実に背いて生きる私たちの無明煩惱にあります。もちろん、私たちはこの命を終え  
る瞬間まで、我欲に執われた煩惱具足の愚かな存在であり、仏さまのような執われのない完全に清  
らかな行いはいできません。しかし、それでも仏法を依りどころとして生きていくことで、私たちは  
他者の喜びを自らの喜びとし、他者の苦しみを自らの苦しみとするなど、少しでも仏さまのお心に  
かなう生き方を目指し、精一杯努力させていただく人間になるのです。

国の内外、あらゆる人びとに阿弥陀如来の智慧と慈悲を正しく、わかりやすく伝え、そのお心に  
かなうよう私たち一人ひとりが行動することにより、自他ともに心豊かに生きていくことのでき  
る社会の実現に努めたいと思います。世界の幸せのため、実践運動の推進を通し、ともに確かな歩  
みを進めてまいりましょう。

2016（平成28）年10月1日

浄土真宗本願寺派門主

大谷 光淳